

62  
2014  
Winter



在学生のワタシ★アクション!

「弓道」を追求しながら  
地域の福祉を支える人に。

特集01 地域に根ざした実習教育で

これからの福祉を担う人材を。

特集02 海外留学生との復興支援活動

ラボ★アクション!

キャンパスフレンズ・混声合唱団 Polish

KENDAINNEWS

ケンダイ広報局

卒業生のワタシ★アクション!

62  
2014  
Winter



卒業生のワタシ★アクション!

若者とITのチカラを活かし  
岩手の未来をデザインする。



ルプシャ先生が翻訳を手がけた川端康成の短編集と、言語研究に関する本。

## ラボ★アクション!

# 先生たちの 研究の流儀

地域のシンクタンクであり、多彩な学部を擁する岩手県立大学には、個性豊かな先生がたくさんいる。彼らがどんな想いを抱き、日々どんな研究に取り組んでいるのか。その横顔に迫ってみたい。



大学では基盤教育の英語の授業を担当している。

「言語は本当に興味が尽きない研究テーマ。研究をすればするほど、もっと知りたい、解明したい、という気持ちが生まれてきます。」  
とても流暢な日本語でそう話すのは、ルーマニア出身のルプシャ先生。准教授として英語の授業を担当しながら、言語に関する研究に取り組んでいる。  
小さい頃から、語学に興味があったというルプシャ先生。大学の外国語学部に進み、「ヨーロッパの言語と全く違う言葉」を学ぶ

**知れば知るほど、奥深い  
言語学の世界に  
魅了されています**

たい」と主専攻に日本語学を選択。学ぶほどに言語の奥深さに魅了され「もっと研究を続けたい」と、日本行きを決定。弘前大学や東北大学の大学院で研究を続けてきた。  
「異なる言語には、文法や品詞の使い方などの『違い』が多く見られますが、その一方で共通点もあります。例えば、『駅へ行く』『going to the station』のように、名詞と動詞を直接つなげないルールもそのひとつ。人間の脳の働きは同じだから、言葉がでかあがる過程にも必ず共通点があると考えられているんですね。そういう『違い』や『共通点』は本当に興味深くて、研究してみたいテーマがまだまだたくさんあります。」

近年では、川端康成の短編集のルーマニア語翻訳にも挑戦。「どんなふうに翻訳すれば、ルーマニアの人が違和感なく物語を読めるか、というところを常に意識しました」と振り返り、谷崎潤一郎など他の作家の

### DATA ルプシャ・コルネリア・ダニエラ 准教授

ルーマニア・ブカレスト生まれ。ブカレスト大学外国語学部で日本語学、日本文学、英語学、英米文学を学ぶ。1997年来日し、弘前大学大学院の人文科学研究科で修士課程を修了。その後東北大学大学院文学研究科に進み博士(文学)を取得する。2009年から岩手県立大学に勤務。英語の授業を受け持つ傍ら、言語学の研究を続けている。また、川端康成の作品をルーマニア語に翻訳するなど、翻訳者としての一面も。

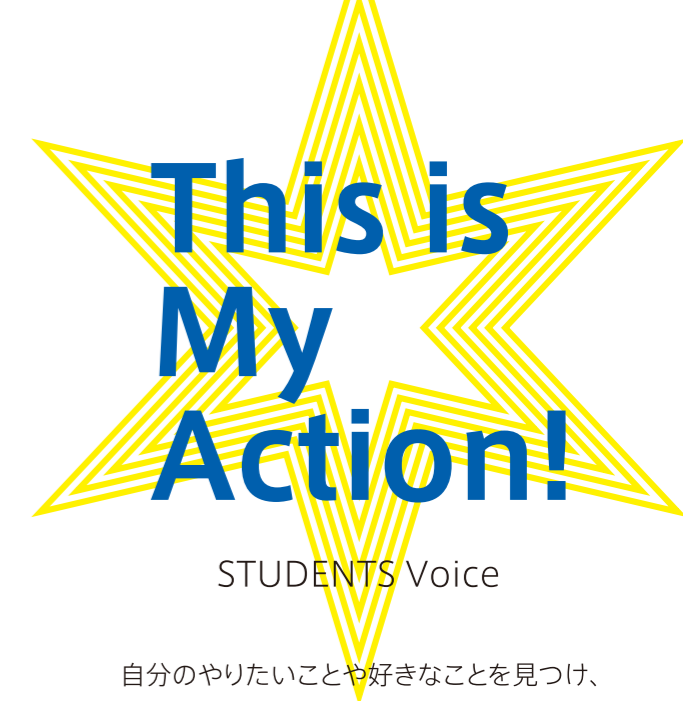
翻訳も手がけてみたい、と抱負も。「宮沢賢治の不思議な世界観も、児童やティーンエイジャー向けに翻訳したら面白そうですね」と笑顔を見せる。

岩手県立大学の教員となって間もなく7年。学生たちの印象を訊ねると、「とてもまじめ。でも、もう少し積極的になってほしいなあともあります」というコメント。今後は、テキストだけでなく、映画やドラマなどを教材に「生きた英語」を学ぶ授業にも取り組んでみたい、と話すルプシャ先生。一方で、こんな抱負も語ってくれた。

「言語について深く知ることは、自分たちが話している言葉に興味を持ち、世界を広げるきっかけになります。いつかは、研究分野である『言語学』の授業を持ち、その魅力を学生たちに伝えられたらいいなと思っています。」



福祉の道と弓道の両立で  
それぞれの道を極めていきたい。



STUDENTS Voice

自分のやりたいことや好きなことを見つけ、その実現に向かって頑張っている学生たちがいる。彼らが何を思い、どんな行動を起こしているのか。一人ひとりの「ワタシアクション!」をご紹介します。

胴衣を身に付けると、自然に気持ちも引き締まるという。弓道部の仲間たちと一緒に。

高校のとき、袴姿に憧れて弓道部に入りました。強い選手ではありませんでした。的に向かい集中する時間が好きでした。だから、大学進学後も自然な流れで弓道部へ。その時は、まさか自分が国体に出場する選手になれるとは思っていませんでした。  
ターニングポイントは大学2年生のとき。すごく調子がよくなったのか、県の大会で個人優勝したんです。私自身びっくりしました。それがきっかけで国体の強化選手に選ばれ、その年から3年連続で国体に出場。今年の長崎国体では遠的という種目で、岩手県の成年女子初の優勝をすることができました。  
強化選手に選ばれてから、週末はほとんど練習会。初めは大学の勉強や実習との両立に苦労しましたが、今はスキマ時間を有効活用するよう心がけています。短い時間でも集中して取り組めるのは、弓道をやっているおかげかもしれません。高校時代、顧問の先生に「日常生活での勉強や礼儀をきちんとできなければ、弓道は上達しない」と厳しく指導していただいたことがいろいろな場面で生かされていることを実感しますし、その度に弓道の奥深さや魅力を再確認しています。  
現在私は、社会福祉学部の4年生。卒業後は福祉の道に進み、ソーシャルワーカーとして地元で働きたいと考えています。もちろん弓道もずっと続けていきたい。まずは、2016年の岩手国体まで出場し続けることが目標です。

## ワタシ★アクション!

社会福祉学部4年  
菊池 ひかり Hikari Kikuchi

1992年生、岩手県釜石市出身。釜石高校卒業。高校から弓道を始める。「福祉の現場で働く人になりたい」と、社会福祉学部のある岩手県立大学に進学。好きな言葉は、出身高校の教育理念でもある「文礼一如」。学びと礼儀は一体のもの、という意味があり「弓道で学んだことに通じるものがあって、いつも思い出す言葉」と話す。



..See You  
Next  
Action!

# 地域に根ざした実習教育で これからの福祉を担う人材を

社会福祉のニーズが多様化、複雑化している中、地域の福祉を支える担い手として期待が高まる福祉専門職。中でも「社会福祉士」は、社会福祉学部の学生の多くが資格取得を目指している。その育成カリキュラムの中心になるのが「ソーシャルワーク現場実習」。大学と学生、そして受け入れ先である地域との連携によって行われ、専門知識や技術の習得だけでなく、専門職としてのアイデンティティの構築や、学生自身の成長の場にもなっている。



学生たちは毎日、1日の学びを報告書にまとめ、実習指導者との間で共有している。



学生たちは4週間の実習を通して、「地域福祉」のさまざまな業務を体験する。



前期の実習で行われた認知症サポーター養成講座で認知症声かけクイズなどを行う学生たち。



利用者との関係づくりもソーシャルワーカーの大事な仕事。



利用者の話を詳細にヒアリングし、実際にお世話をするヘルパーとも相談しながら今後のケアプランの計画を立てる。

## 実践の場で学びを深める 「ソーシャルワーク現場実習」

日常生活に困難を抱える人の福祉に関する相談に応じ、福祉サービスや支援の活用をサポートする「社会福祉士」は、社会福祉に関する主要な国家資格。福祉施設や福祉事務所、病院など活躍の場は幅広く、福祉分野の専門職を目指す人にとって重要な資格といえる。

岩手県立大学社会福祉学部では、地域で幅広く貢献できる社会福祉士の育成を目指し、カリキュラムを作成。2つある学科のどちらでも履修が可能で、指定科目を取れば受験資格が得られ、4年次に国家試験を受験することができる。

なかでも重きを置いているのが、4週間180時間をかけて行う「ソーシャルワーク現場実習」。地域の福祉施設や機関での現場体験を通じて、社会福祉士に求められる知識や技術を学ぶことが目的で、国家試験の受験資格を取得するためには必須の科目。他では4週間連続での実習を行うところが多いなか、県立大学は2週間ずつ前後期に分けて実施。3年次はこの実習を柱としたカリキュラムが組まれ、今年度は85名が62ヶ所の施設で実習を行っている。

前期での実習をしっかりと振り返り、課題や目標を明確にしたうえで後期に臨むことで、現場における知識や技術の習得だけでなく、「気づく力」「課題を解決する力」など学生の成長にもつながるという。

## 現場を体験し得た「気づき」が 成長の源になる

実習受け入れ先のひとつ、花巻市の「石鳥谷地域包括支援センター」では、瀬川友香さん、鎌田ほのかさん(社会福祉学部3年)が11月4日から17日までの2週間、後期実習に取り組んだ。

実習指導者・鈴木晴美さんが「普段の仕事を見てほしい」と、いろいろな現場に同行させてくれたおかげで、地域福祉のさまざまなケースに立ち会うことができた、と前期実習を振り返るふたり。「現場に出てみて、ちゃんと理解できていないと気づいた」「専門用語や制度の仕組みを復習しておくなど、しっかりと準備を整え後期実習に臨んだ。

取材に訪れた日には、介護認定の更新に伴うケアプラン作成のため、ケアマネージャーである鈴木さんとともに利用者の自宅を訪問。今後必要になる介護サービスを評価する「アセスメント」に立ち会った。

「家族のことやこれからのことなど、鈴木さんの話の引き出し方がとても自然で、さすがだと思いました」と鎌田さん。瀬川さんも「メモを取る時下を向いてしまいがちなので、顔を見て会話しながらメモを取るタイミングも参考になりました」と話すなど、現場だからこそ気づきがあったようだ。

実践の場で、自らが見つけた学びや課題。そのひとつひとつが成長の糧となり、未来の「福祉の担い手」を育てていく。

様々な実習生を受け入れている「実習指導者」は、県立大学の実習にどんな意義を見出しているのか。また、「卒業生」は実習での経験をどのように生かしているのか。大学とは違う目線から、実習をとらえてみたい。

## 実習指導者に聞く!

一生懸命「学ぼう」とする姿勢が  
仕事の意義や素直な感情を呼び覚ましてくれます



石鳥谷地域包括支援センター  
管理者兼主任介護支援専門員  
鈴木 晴美 さん(社会福祉士)

これまで何度か県立大学の学生さんを受け入れています。みなさんとても真面目で一生懸命。自分自身の課題や目標もきちんと持って、「準備をして実習に臨んでいる」というのがよくわかります。大学のフォローも丁寧で、事前訪問で学生さんたちが実習に何を求めているかを知ることができますし、指導者会議で他の施設の方々と情報交換もできるのも、なかなかない機会なので助かっています。

今回、来てくれた鎌田さん、瀬川さんは前期実習の時からとても温和勤勉で優秀。考察力も素晴らしいものがありました。毎日のレポートも「今日はどんな気づきや発見があったのかな」と楽しみで、同時に「きちんとお返事をしなければ」と身が引き締まります。私たちの仕事は、日々業務に追われがちで、とすれば専門職として持っているべき倫理観を失いがちになることもあります。そんな中、学生さんたちの一生懸命に学ぼうとする姿勢は、忘れかけていた仕事の意義や目標、誇りなどの素直な感情が呼び覚まされ、私たちにとてもいい刺激になっています。

実習指導者は、上立って指導するだけでなく、実習生と共に歩むという大原則があることも実習受け入れの大きな意義だと思っています。

## 卒業生に聞く!

いい子にならず、思い切ってぶつかってみてもいい  
失敗や間違いから学ぶこともたくさんあります

2003年に社会福祉学部を卒業後大学院に進み、2005年に修士課程を修了。現在の職場に就職し、ソーシャルワーカーとして働いています。

学部生時代の私は理想が高く、実習先でも、講義で学んだことと現場にギャップがあることに納得できず「どうして理想通りにできないのか?」と質問するような学生でした。

社会人になり、今は実習を受け入れる立場になりましたが、来てくれる県立大学の学生さんたちはとても真面目でいい子ばかり。でも少し物足りないな、とも感じています。思い切り失敗できるのも、納得いかないことを素直に「おかしい」と言えるのも、学生の特権。失敗から得られる学びはたくさんありますし、ぶつかったり悩んだりしながら乗り越えることが、自分にとってかけがえのない財産になるはずですよ。

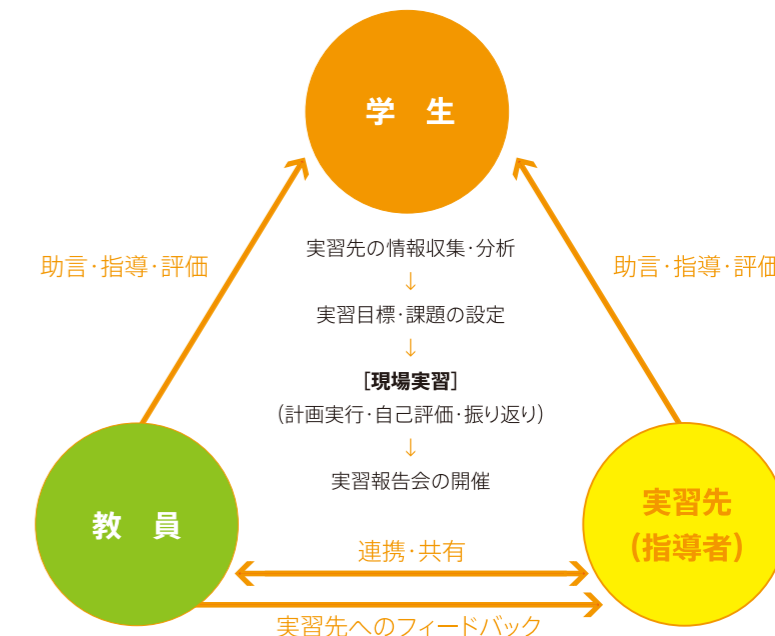
福祉は、人に寄り添う仕事。相手を知り、理解するためには、まず「自分を知る」ことが大事だと思っています。必要以上に「いい子」になろうとしたり、失敗や恥をかくことを恐れず、率直な自分でぶつかって来てほしい。そう思っています。



在宅介護支援センター松崎  
所長代理  
本山 潤一郎 さん

### [社会福祉学部の現場実習の流れ]

大学と実習先が連携を取りながら、[学生・実習先・教員]の3者の協働によって、現場実習が行われている。



受け入れ先の担当者を対象とした「実習指導者講習会」の様子。実習指導者を養成すると共に、実習先と大学との連携を密にしている。



後期の授業「ソーシャルワーク演習Ⅲ」では、前期の演習で得た経験をもとに、事例検討などを行う。



現場実習を終えた後は、振り返りとして実習種別ごとに受け入れ先の指導者も参加しての「実習報告会」が行われる。



実習教育開発室には専門の実習スタッフがいて、実習についての相談などにものっている。

大学と実習先の連携を深めながら  
教育と実践の場をつないでいく

現場実習を通して、学生たちは実に多くのことを学ぶ。机上の理論だけではつかみ得ない福祉現場の現実を知り、自ら考え、自身への気づきを深めていくのだ。

このような社会福祉学部の現場実習は、前ページのソーシャルワーク現場実習のほか、精神保健福祉援助実習、児童福祉実習、福祉調査実習、教育実習(幼稚園教諭)などがある。この実習にも共通して言えるのは、実習は「学生・実習先・教員」の3者による「協働作業」であるということだ。

地域の幅広い福祉を学ぶソーシャルワーク現場実習では、実習先と大学の連携を図るため、実習前には「実習指導者会議」を開き、実習内容や年度計画についての説明や意見交換を行い、共通理解を深められるようにしている。

また、学生指導については、講義・演習実習を一体的に行っており、実習前には、実習の目的や内容、実習施設について学生の理解を深めるオリエンテーションや学生による施設訪問を実施。実習中は、教員による「巡回指導」し、学生を大学に招集する「帰校日指導」が行われ、教員⇄実習先、教員⇄学生間で、課題や問題点などを話し合い、スムーズに実習に臨めるようにサポートしている。

実習終了後には、実習の成果、課題や反省点などを、「学生・実習先・教員」の3者で共有・検討する「実習報告会」を開催するなど、一体的なカリキュラムが組まれているのだ。

このような実習教育を教員と連携し、実習先との調整などを行っているのが、「実習教育開発室」だ。専門のスタッフが実習教育に関する調査・研究を行うとともに、実習に関連する研修会も開催するなど、現場での福祉実践と教育・研究との橋渡し役を担っているのも、本学部の実習の特徴である。

# Campus Friends

Vol.2

## 混声合唱団 Polish

県立大学のサークルや同好会、

学生会活動を紹介する「キャンパスフレンドズ」。

生き生きと活動する学生たちの様子をチェックしてみよう。



## DATA

### 岩手県立大学混声合唱団 Polish

平成19年に結成され、部員数は36名。平成24年3月に「Hand in Hand」プロジェクトの招きでニューヨーク公演を果たすなど、県内外で幅広く演奏活動を行っている。3月14日(土)には、盛岡駅前のマリオス・小ホールで「第4回定期演奏会」を開催予定。テーマは「うたの三原色」で、観客・学生・曲の3軸で一つの音楽を創るという意味合いを込めているとか。



デイサービス施設への訪問演奏にて

ねと、玉津さん。  
一人では表現できないことが、みんなの力を重ねることによって美しいハーモニーを生み出し、ひとの心を揺さぶる。自分たちの音楽を多くの人に届けるために、学生たちは3月の定期演奏会に向けて練習に励んでいる。

「いい合唱ができたと思うときって、歌い終わった瞬間の音の残響が違う。ふわっと音の余韻が残るんです。みんなの心がひとつになったと、やり遂げた達成感を感じます」  
ポリッシュの練習日は週2回。火曜日は外部の講師を招いて指導を受け、金曜日は自分たちだけで練習をする。「部内には曲の背景を調べたり、曲の解釈を担当する文芸班もあって、それぞれの意見をぶつけ合って自分たちの表現をまとめていく。そのプロセスが大事なんです」と、指揮を担当する柴田勇希さん(ソフトウェア情報学部2年)は強調する。みんなでひとつの曲を、県立大学らしい音楽を磨き上げていく...その積み重ねが合唱の魅力であり、本番のステージでの表現力に確実に現れるものだという。

「中学校や高校では先生の指導のもとで歌いますが、大学は専任の指導者が必ずいるわけではありません。学生みんなで力を合わせて、自分たちの音楽を創り上げていく。それが大学の合唱部の醍醐味です」と話すのは、岩手県立大学混声合唱団ポリッシュの代表・玉津里歩さん(総合政策学部3年)。結成7年目の今年、全日本合唱コンクール東北支部大会において、創部以来初となる金賞を受賞。全国大会への出場こそ逃したが、「みんなで創り上げていく音楽が実を結んだ証しだ。」

一人ひとりの想いを重ねながら、自分たちの音楽を創っていく。

◎ 留学生との交流によって国際感覚を養う。

◎ 支援活動を通じて復興の現状を学ぶ。



「どんな小さなことでも支援することに大きな意味がある。引き続き復興支援に携わりたい」と話す、トムソン准教授。

東日本大震災が起こった平成23年、アメリカから岩手県立大学にボランティアの申し出が舞い込んだ。連絡をしたのは、オハイオ大学のクリストファー・S・トムソン准教授。かつて岩手県に住んでいたことから、「被災地の力になりたい」と本学の知人に声をかけ、共同での支援活動を打診したのだ。これを受けて本学では、学生同士の国際交流も踏まえてボランティアプログラムを作成。平成25年度までの3年間で延べ78名の学生たちを海外から迎え、大槌町や陸前高田市を中心に菜の花を植える活動や、仮設住宅などに飲料水やお茶ペットボトルを手渡しで届けるボランティアへの受け入れを実施。昨年から、新たに「本庄国際奨学財団」の留学生たちも仲間に加わり、オハイオ大学、本学とともに支援活動に取り組みながら、交流を深めてきた。

支援の心がつないだ国際交流で海外と岩手の絆を育んでいく



9/26、27は大槌町、9/28は陸前高田市で活動。参加者はオハイオ大学:学生11名、岩手県立大学:学生22名、本庄国際奨学財団:奨学生24名、大槌高校生:8名(9/27のみ)



「活動に参加してみて、支援を継続することの大切さを学びました」と話す、盛岡短期大学の吉田涼奈さん。

このプロジェクトは来年で一区切りとなるが、育んだ絆をさらに深めるため新たな形で交流をつないでいきたいと考えている。

しかし、被災地の状況が変わっていく中で、求められる支援活動も次第に変化。4年目となる今年は、「語り部」による震災体験講話や「郷土芸能を通じた交流活動」などを新たに取り入れ、教育的・文化的な側面も踏まえたプログラムを構成している。トムソン准教授は「事前に被災地の状況を勉強して参加していますが、実際に被災地の現実を目の当たりにして、復興が進んでいないことに驚く学生が多いですね。しかし、国籍の異なる学生たちが活動をとにもすることでお互いの刺激になったり、新たな友情が育まれるなど、大きなメリットを感じています」と、共同活動の効果を実感している。一方、本学においても国際交流を兼ねた支援活動は、大切な学びの場。被災地の現状を知り支援の心を育むと同時に、他国の学生の考え方や行動に触れ、改めて自分を見つめ直す貴重な機会となっている。

ボランティア活動を通じて異文化に触れ、友情を温める

今回のボランティアには、本学学生も含めて総勢87名が参加。特に本庄国際奨学財団では、インドネシア、ウガンダ、ジンバブエ、キシコなど、18カ国の留学生が顔を揃えた。3日間の活動中、英語と日本語を交えてコミュニケーションを取り、寝食をともにした学生たちは、短い間にすっかり友だちに。「一緒に活動して感じたのは、ボランティアに国境の壁はないということ。彼らは自分たちよりも親身になって、被災地を心配していました。その姿を見て、ボランティアは全世界の人々が協力できる素晴らしいことだと実感しました。もし外国で災害が起こったら、私も支援に出向きたいです」と話すのは、盛岡短期大学の吉田涼奈さん(国際文化学科・1年)。

特集 02 Features02 海外留学生との復興支援活動

# 国を超えたつながりで復興支援にスクラム!

去る9月26日から28日までの3日間、大槌町と陸前高田市においてオハイオ大学、本庄国際奨学財団の学生と一緒に、復興支援活動を行った。これは震災直後から毎年続いている、国際交流を兼ねた復興支援プロジェクト。盛岡短期大学部を中心とした本学の学生たちは、様々な国籍の学生たちと協力し合いながら、活動に汗を流した。





TAKIZAWA CAMPUS 10.25,26

**大学祭とオープンキャンパスを同時開催!  
笑顔が咲いた2日間**

10月25、26日の2日間、大学祭「IPU Festa 2014」が開催されました。好天に恵まれ青空のもとでの開催となり、昨年を大きく上回る2万5千人が来場し、模擬店やステージイベントは多くの人で賑わいました。またオープンキャンパスも同時開催され、高校生の皆さんには楽しみながら大学を体感していただきました。今回のテーマ「つぼみ～咲(わら)え 大輪の花～」に込められた願いの通り、参加者・来場者みなさんの笑顔が咲いた2日間となりました。

**宮古短期大学部「蒼翔祭」、  
テーマは「真(まこと)」**

滝沢キャンパスと同じく、10月25、26日に行われた宮古キャンパスの大学祭「蒼翔祭」。今年で25回目を迎えました。テーマ「真(まこと)」は日ごろ支えてくれている家族や地域の方々に感謝の気持ちを伝えたいという想いと、皆さんと共に未来へ真っすぐに歩いてゆきたいという想いを込めて決めたもの。毎年恒例のゼミ模擬店や仮装コンテストをはじめ、人気イベントのスタンプラリーやピンゴ大会などで、2日間ともたくさんの方に楽しんでいただきました。



9.19,20

**岩手県立大学研究成果発表会を開催しました**

平成26年度の岩手県立大学研究成果発表会が9月19、20日に開催されました。昨年度初めて実施され、今年度が2回目の開催となります。初日は柴田副学長の挨拶の後、いわてものづくり・ソフトウェア融合テクノロジーセンター(i-MOS)研究の成果発表・パネル展示が行われ、発表では訪れた方々が熱心に耳を傾けていました。また、2日目は地域政策研究センターで実施した震災復興・地域課題研究と、学部の震災復興研究などの講演発表やパネル展示を行い、本学の研究を知っていただく貴重な機会となりました。



MIYAKO CAMPUS

10.25,26

**「うめえもん届け隊」が届ける岩手県沿岸の「うめえもん」詰め合わせ!**

10月15日に、全国の大学と協力し、岩手県沿岸部の魅力を人や食を通して全国へ発信する学生団体「うめえもん届け隊」のメンバーが活動報告で学長室を訪問しました。平成25年度の「いわてGINGA-NETプロジェクト」の活動をきっかけに生まれた、岩手県立大学と盛岡大学の有志による学生団体です。今回は大槌町と釜石市の「銘菓と海の幸」をひとつにパッケージした詰め合わせを作成。本学をはじめ、プロジェクトに参加する他県の大学の大学祭で販売されました。



10.15

**「オオハンゴンソウ」から外来種問題を考えるシンポジウム**

総合政策学部主催の「外来種問題を考えるシンポジウム」が11月9日にアイーナで開催されました。県内各地に広がった外来植物「オオハンゴンソウ」を中心に、外来生物の存在や自然環境への影響などを知り、行政、市民、研究者が協力して対策を考えるきっかけ作りを目的としたもので、約100名が参加しました。なお、たぎざわ環境パートナー会議と協働で行ったオオハンゴンソウの分布調査に関する研究と取り組みは、環境省が実施する本年度の「東北地方ESDプログラム チャレンジプロジェクト」にて、優秀賞を受賞しました。



11.9

**みんなで植えたどんぐりの木、大きくな～れ!**

10月15日、川前保育園の園児の皆さんを招いての「どんぐり拾いと植樹」が行われました。平成19年からスタートして、今年で8回目の実施です。みんなでコナラなどのどんぐりを拾い、虫食いの実を取り除いてからポットに種まき。その後、昨年拾ったどんぐりから育てた苗木を植樹しました。最後には、太陽のパワーを手にためて「おおきな～れ!」とおまじない。早く大きくなって、たくさんどんぐりがなるといいですね!



10.15

**大学院看護学研究科の入試説明会を初開催**

10月24日、本学大学院看護学研究科としては初めてとなる入試説明会がアイーナで開催されました。初開催にもかかわらず、県内外から看護師の方々を中心に16名が参加。武田看護学研究科長より大学院で学ぶことの意義や研究の進め方などが説明され、研究科修士や在学生の仕事をしながら研究活動を行なった体験談や苦労話に及ぶと、参加者は熱心な様子で聞き入っていました。具体的な受験準備に関する質問もあり、看護職の方々の進学に対する手応えを感じる説明会となりました。



10.24

**いわて若者文化祭で活動発表!**

11月15、16日の2日間、県内の若者の多様な文化・芸術活動の成果を披露する「いわて若者文化祭」が盛岡市で初めて開催されました。当日はステージ発表や展示発表など計96団体が参加。岩手県立大学では学生の団体がストリートダンスやダブルダッチ、さんざ踊り、アカベラを披露したほか、ソフトウェア情報学部の学生が中心となって活動しているグループが開発したアプリの展示発表が行われました。

おでってホールで行われたオープニングのステージではストリートダンスとダブルダッチの迫力あるパフォーマンスが上演され、観客はそのパワーあふれる演技に魅了されていました。



11.15,16



11.15,16

**全国の「大学人」が集った参加型シンポジウム**

11月15、16日に「つながれ!かがやく大学人」をテーマに、「第8回大学人サミットいわてカレッジ2014」が本学で開催されました。この催しは全国の大学人(職員・教員・学生など)が国公立の枠を超えて共に集う参加型シンポジウムです。全国45機関から133名が参加し、ワークショップや情報交換会などを通して交流を深めました。2日目の「大学自慢コンテスト」では、10大学がエントリーして発表。職員や学生たちが熱いプレゼンテーションでそれぞれの大学を自慢しました。

**学生が多数出演!大学の紹介動画公開中!**



岩手県立大学では、大学の魅力を伝える紹介動画(PV)を制作しました!本学での学びや学生生活のイメージを高校生をはじめ多くの方に伝えることをコンセプトに、構成は各学部学生会を中心とした学生の意見を元に制作。豊かな自然に囲まれたキャンパスを舞台に、各学部やサークルの様子など、学生のキャンパスライフの一端を紹介しています。出演しているのは、もちろん岩手県立大学の現役の学生たち!特に最後のシーン、BGMである岩手出身の注目バンドSWANKY DOGSの「ワンシーン」の大合唱は見所です。ありのままの岩手県立大学、そして県大生をぜひご覧下さい!



# This is My Action!

OB&OG Voice

大学で学んだことを自分の糧としながら、様々な分野で活躍する県立大学の卒業生たち。それぞれの職場や地域で頑張っている卒業生の「ワタシアクション!」をご紹介します。

## 編集後記

10年前実習教育に関わったこともあり、今回特集1を企画しました。大学は人材を育成するところですが、大学だけでは人材は育ちません。地域での学びがあってこそ学生は成長します。実習での経験は貴重な財産です。本業の傍らに人材教育に尽力していただいている実習先の指導者の方々には只々感謝するばかりです。今回取材させていただいた本山さんをはじめ多くの卒業生が県内の福祉の現場で活躍し、今は指導者として福祉の担い手を育てています。この連鎖が続き、多くの福祉専門職が育っていくことを願います。(企画室:村上郁子)

## IPU公式アカウントについて

岩手県立大学では、お知らせやイベント情報などについて、よりリアルタイムに発信をするためTwitter公式アカウント【@IPU\_official】で情報提供を行っています。さらに、インターネット上での情報発信力をより一層強化するために、Facebook、YouTube等の活用も行っていきます。是非、Twitterアカウントの「フォロー」、Facebookページの「いいね!」によりコンテンツをご覧ください。



〒020-0693 岩手県滝沢市菓子152-52 TEL.019-694-2000 FAX.019-694-2001  
[URL]http://www.iwate-pu.ac.jp/ [e-mail]management@ml.iwate-pu.ac.jp

[看護学部] [社会福祉学部] [ソフトウェア情報学部] [総合政策学部] [盛岡短期大学部] [宮古短期大学部]



本学で開催した「企業論」で講演をする様子。

岩手で若者が活躍できる仕組みをつくること、それが僕らの目指す「本当の復興」。

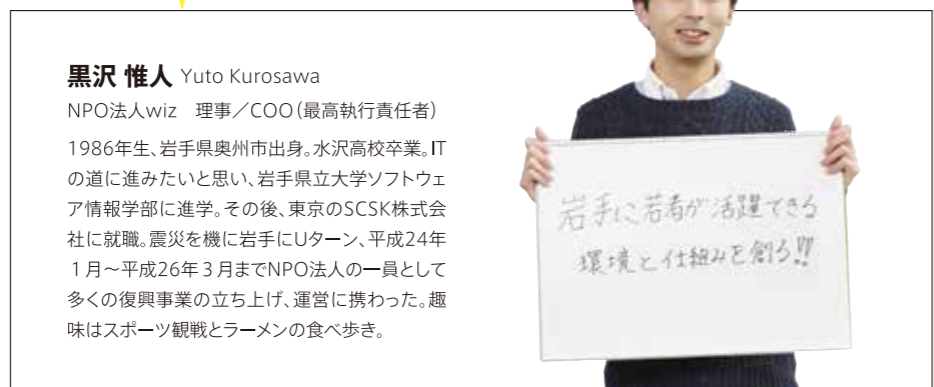
このまま岩手においても、自立できる力は身につかない。そう考えた私は、東京のIT企業に就職。でも、IT分野だけのシステム開発よりも、全体を含めた「仕組みづくり」に興味があったため、開発の一端しか担えない仕事に閉塞感を抱いていました。そんな最中に、震災が発生。当時、月に1度ボランティア活動を行っていましたが、長期的に岩手に関わり、仕組みを作りたいと思い、平成23年12月にUターンしました。

NPO法人の一員として仮設住宅を支援する復興事業などに携わる中、私の発案でスタッフのPCスキルを上げる研修・サポートを始めました。これは研修に加えて、一人で学べる学習システムを活用して、スキルアップを図る試み。岩手でITの仕事を作るには、県民のITリテラシーの底上げが必要だと考え、県立大学と協力して取り組んだプロジェクトです。

NPOという立場で働いた2年間、民間企業での経験を活かしながら、NPO運営、行政と事業を行うノウハウを学びました。また、多くの人と出会いを重ねるうちに、「黒沢と仕事がしたい」と名指しで言ってもらえるようになりました。

そして平成26年4月、復興支援で知り合った仲間たちと「NPO法人wiz」をスタート。目指すのは、若者の力をつないで岩手を盛り上げていくことです。新規事業を行うために学生と企業をマッチングしたり、若者同士のネットワークをつくったり、いろいろな事業を起しながら、活性化のための新しい仕組みをデザインしたい。将来、岩手の若者を100人雇用できる若者カンパニーを創るのが目標です。

## ワタシ★アクション!



**黒沢 惟人** Yuto Kurosawa  
NPO法人wiz 理事/COO (最高執行責任者)  
1986年生、岩手県奥州市出身。水沢高校卒業。ITの道に進みたいと思い、岩手県立大学ソフトウェア情報学部に進学。その後、東京のSCSK株式会社に就職。震災を機に岩手にUターン。平成24年1月～平成26年3月までNPO法人の一員として多くの復興事業の立ち上げ、運営に携わった。趣味はスポーツ観戦とラーメンの食べ歩き。

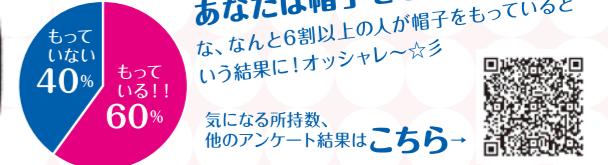
...See You Next Action!

岩手県立大学の魅力を発信すべく日々活動する学生団体、キャンパスアテンダント(CA)。そんなCAたちがお送りする、県大生の県大生による県大生の今を伝えるためのコーナーです。バ(\*∇\*)ン

# ケンダイ★広報局

学生★企画

県大生141人に聞いた!  
あなたは帽子をもっている!?  
な、なんと6割以上の方が帽子をもっているという結果に! オッシャレ☆多☆



## 冬コーデちゃんねる

今回は県大生のファッションに注目  
県大のオシャレさん達に取材しました (°∇°)!

Q1→参考しているもの Q2→服を買うお店 Q3→よく買ってしまうもの Q4→必ず身に付けているもの

### 色味の統一感

Q1→ Zipper, FUDGE などの雑誌、服屋のバイトで流行を勉強しています  
Q2→ ドンドンダウン  
Q3→ ジージャン、帽子  
Q4→ 伊達めがね、帽子

古着屋が中学の時から大好き! 好きな服をたくさん買えるのが嬉しい。服はカラフルなものが好きで、一目惚れで買っちゃいます。メンズの服も見ることがあります。

〈記者から一言〉  
普段から目を引くファッション☆古着への愛を感じました! ネイルや小物などのこだわりが脱帽☆多☆

### 大人な雰囲気

Q1→ TVで芸能人を参考にしている玉山鉄二さん、藤木直人さんがカッコイイと思っています  
Q2→ JUN MEN, GAP  
Q3→ カーディガン  
Q4→ 腕時計

もうすぐ社会人になるので、落ち着きのある、大人な雰囲気を心がけています。ファッション雑誌はあまり見ないです。TVに出てくる芸能人を参考にすることが多いです。

〈記者から一言〉  
落ち着いた感じで大人の雰囲気演出♪さすが四年生!! シンプルだけどカッコイイ♡

### 自分らしさ

Q1→ MER, SEDA などの雑誌を参考にしています  
Q2→ レトロガール  
Q3→ 帽子は10個くらい持ってる  
Q4→ ピアスは毎日欠かさず付けてます!

MERの柴田紗希ちゃんが可愛くて参考にしています。ヘアアレンジは雑誌を見て、見様見真似でやっています。靴は母と兼用していて、合計20足以上持っています!

〈記者から一言〉  
ヘアアレンジに力を入れていて素敵! 女の子らしいコーデ☆がとってもキュートです♡

## キャスト

今回は私たちがクリスマスコーデにしてみました☆多☆ ((o((≧∇≦)))♪

### たくちゃん

Q1→ 流行りのミリタリーに素敵な笑顔が決め手です  
Q2→ みんなでワイワイ鍋を食べたいです!  
Q3→ クリスマスプレゼントは松下奈緒でお願いします

### もどちゃん

Q1→ ふわふわマフラー♡  
Q2→ モスチンとチョコケーキを食べます!  
Q3→ 県大のわくわくどきどきをお届けします!!!

### かなっぺ

Q1→ 茶色で統一したつもりです。なげなしの女子力をかき集めました  
Q2→ 実家で年末待つ以外になにかあるんですかね?  
Q3→ 普段はスボン履いているので、とても寒いと感じました。世の女の子は努力の塊なんだな、と感心しました

Q1→服のポイント Q2→クリスマスの過ごし方 Q3→一言